【メルディア】一般財団法人メルディア 広報誌

MELDIA

FREE
VOL.63
SEP.2024

息子がくれた気づき。
社会と福祉がもっと〝なだらか〟になることを願って

自分の特性の良い面も悪い面も、発達障がいの視点から認識してプラスに

おさんぽ DE 楽しむ！
～みさきまぐろきっぷで満腹、満足な三崎旅～

子どもの自主性と自立心を育む モンテッソーリ教育

周りに頼る術を身に付けて、
心の向こう側にあるポジティブな気持ちを見つけてほしい

MIYUKI TORII

周りに頼る術を身に付けて、心の向こう側にあるポジティブな気持ちを見つけてほしい

お笑い芸人や俳優、絵本作家など幅広いジャンルで活躍する鳥居みゆきさん。出演番組をきっかけに児童発達について学びたいと資格を取得されました。発達障がいの理解が広がってほしいと、現在の想いを聞かせてくださいました。

児童発達について正しく答えられるようになりたい

NHKのEテレ「でこぼこポン！」への出演をきっかけに周りの人や街で声を掛けられる際に発達障がいについて質問をされることが増えたと言う鳥居さん。その時に「私はでこりん役として演じているだけなので、分からないと答えるしかなかったのです。けれど、それではダメだ、もっと自覚を持ちたい、正しく答えられるようになりたいと思って」と、発達障がいに関する2つの資格を取得されたそう。「勉強しているときは、興味があるから内容がスラスラと頭に入ってきました。学生時代は記憶してそれを書けばいいやと思っていましたが、今回は分からないことがあればちゃんと咀嚼して、意味を正しく理解しようと取り組んでいましたね」と話します。

鳥居さんが資格勉強していた時のノート

CONTENTS

VOL.63 MELDIA 2024 SEP

03 周りに頼る術を身に付けて、心の向こう側にあるポジティブな気持ちを見つけてほしい

06 寄贈レポート
より豊かな社会生活に向けて絵本100冊を寄贈

08 理事長として・母として
子どもが秘めている様々な能力が、明るい未来に繋がると前向きに過ごしてほしい

10 「地域の一員」として障がいのある方々が
生き生きと暮らせることを目指して

12 子どもの自主性と自立心を育むモンテッソーリ教育

14 自分の特性の良い面も悪い面も、発達障がいの視点から認識してプラスに

16 息子がくれた気づき。
社会と福祉がもっと〝なだらか〟になることを願って

18 誰もが楽しみたいよね
だれもが遊べる遊具広場のある公園に遊びに行こう

22 おさんぽ DE 楽しむ！
～みさきまぐろきっぷで満腹、満足な三崎旅～

24 美幸先生とたのしむミラクル絵本ツアー VOL.9

26 仕事の好調も、プライベートの好調も、全ては健康であってこそ
水越けいこ M Size はじまり Again

28 シンママ・まると息子の成長記録

30 りくですよチャンネルが行く！
トレーニングDAYに密着 目指せ！-20kg！

vol.63 MELDIA 2024 SEP.
発行元／一般財団法人 メルディア
広報誌MELDIA Vol.63／2024年9月25日発行

本誌の無断転載・複製を禁じます。
2017-2024©All Rights Reserved.
一般財団法人 メルディア／広報誌MELDIA

無料定期購読のお申し込みはこちらから

※QRコードは(株)デンソーウェーブの登録商標です。

次号予告

MELDIA vol.64

2024年11月25日 発刊予定

一般財団法人 メルディア
〒169-0072 東京都新宿区大久保2-5-22
セキサクビル7F
一般財団法人 メルディア
TEL:03-6302-1871

上手くいかなくても周りの力を借りてみよう！

「〝児童発達支援士〟では、発達障がいの特性を知って、その特性に合った働きかけのアプローチ方法を学び、〝発達障害コミュニケーションサポーター〟では社会生活における人間関係を円満にするためのコミュニケーションスキルを、どうすれば高められるかという内容になっています」。

資格を取得したことで子どもとの関わり方に変化があったかを伺うと、「甥っ子との接し方が変化しました。以前は『みゆきちゃん、これってどういう意味？』と聞かれたら『こういうことだよ』と答えを返していましたが、勉強後は『どういうことだろうね、一緒に考えよう！』という風に」と、子どもたちの考えや表現を刺激するように接するようになったそう。「自分がそれほどちゃんとした人間かって聞かれたら、そうではないので。大人だからといって少しうぬぼれて『教えてあげなきゃ』という風になっていたことを改めました」。

子どもと話しているときの方が気持ちが楽だと話す鳥居さん

1人で解決するのではなく、周りの力を借りていく

番組はどんな制作現場なのでしょうか。「おもしろいですよ。でこりんにもぼこすけにも、それぞれ得意なことと苦手なことがあり、中でも私はでこりんに似ているなと感じる部分もあります。例えば、気に入ったものへのこだわりです。ある回で、でこりんのお気に入りのボールペンのインクが切れて使えなくなり、それじゃなきゃ嫌だと言いますが、妥協点を見つけていこうという話がありました。まさに私も同じような展開になったことがあり、似ているなと。ですが、全く違うところもあります。私は文字から記憶

例えば悩んで頑張って1人で解決するのではなくて、『こうしてみたら』と言って、『そうしてみるね』と試して、でもそれが結構な確率で上手くいかない。『それだったら、こうしてみたら』と周りの人の力を借りて自分で考えるんです。「自分で考えな」でもなく「こうすればいいんだよ」と言わるタイプですが、でこりんはそうではないなど。覚え方一つでも色んなタイプの人がいるんだと勉強になります。聞いて覚えられる方が楽じゃん、できない自分は大変な思いをしてきたと思っていたけれど、できるが故の苦しみもあるんだなと分かりました。要は無いものねだりで、無いからこそいいように見えているだけで、互いに羨ましがっている世界なのだと思います」と語ります。「番組のいいなと思うところは、れるのでもないです。発達障がいの子やグレーゾーンの子に向けた番組とは言っていますが、みんなに共通すると思います」と話します。

障がいのことを知れば知るほど、「役立てることはないか？」

鳥居さんご自身も生きづらいと感じてきたことについて教えてくださいました。「人見知りがゆえに表情がこわばるので、最初は怖がられてしまうことが多いです。始めの印象ってあると思うので、それで未だに生きづらさを感じます。また、学生時代は周りに頼ることをしなかったのですが、大人になってから、人は得意と不得意があるのだから得意な人がやればいいと気づきました。私はリボン結びが子どもの頃からできなくて、人より劣っていると思っていたのですが、今はできる人に『お願い！』って言えるスキルを身に付けられました」。

長く芸能の仕事に携わっている鳥居さんですがその原動力とは何でしょうか。「今は、どこかの誰か1人でも私を見て救われたって思ってくれているのではないかと、それがありがたいなと思って続けられている気がします。以前はいいのかなって思いを持ちながらふわふわした芸風でやっていたのですが、その芸風に自覚を持ってやってみると、『救われた』と言ってくれる人が何人かいました。そう思ってくれている人が他にもいるのかもしれないと思ったら、人って誰かしらの役に立っているなと思えるようになったのです。

発達障がいのことは奥が深く、障がいも1つではなく組み合わせであったり、濃淡があったり、同じ障がい名だからといって同じではない。知れば知るほど、みんなが嫌な気持ちにならない世の中にしていくためにはどうしたらいいのだろう、障がいに苦しむ人のニーズを拾って、役立つものが作れないかなということを最近は考えています」。

特性や個性を伸ばし、二次障がいから守れる社会を

「生きづらさを感じている人に伝えたいのですが、人って簡単には変われないと思います。私もついわがままを言ったとしても、すぐに謝るようにしたり、人前で大人と喋るときは大人っぽい自分を少し演じたりして、だんだんと社会で生きていく術を身に付けてきました。ネガティブに考えても、ネガティブの向こう側にポジティブを見つけられたら、きっと肩の力が抜けると思います。

そして、障がいのことを知らない人にも、受容は別として理解はしてほしいと思います。発達障がいというのは、ただの特性や個性でしかなくて、その後に続く二次障がいというものから避けてあげる手助けが必要なんです。特性や個性を潰そうとするのではなく、そこは伸ばしてその周囲にまとわりついてくる二次障がいから離してあげることが周りの大人たちに求められることだと思います」と社会への理解を願うメッセージを頂きました。

2名様 PRESENT

A
鳥居みゆきサイン入り
JTコラボ・アッシュトレイ
※非売品

詳しくは31ページ

鳥居みゆき

お笑い芸人や俳優、絵本作家、小説家など幅広いジャンルで活動中。発達が気になる子を楽しくサポートする番組「でこぼこポン！」ではでこりん役を務める。
https://sunmusic-gp.co.jp/talent/torii_miyuki/
でこぼこポン！
https://www.nhk.or.jp/school/tokushi/dekoboko/

Donation Report for Takinogawa-Gakuen

寄贈レポート

より豊かな社会生活に向けて絵本100冊を寄贈

一般財団法人メルディア　小池 信三代表理事

一般財団法人メルディアでは障がいのある方々が社会でより良い生活を送れるよう、様々な形で支援しています。今回は滝乃川学園放課後等デイサービス「さにー」の皆様に絵本を寄贈いたしました。利用者の皆さんにとってお気に入りの一冊が見つかりますように。

さにー管理者・柳沢綾子さん（右下）と利用者の皆さん。

青空の下、絵本を渡す小池代表理事。

到着した箱の中から出てくるたくさんの絵本におおはしゃぎの様子。

皆様の笑顔、より豊かな生活に繋がる支援を

前回、130年以上の歴史がある社会福祉施設としてご紹介した滝乃川学園。多くの児童や成人の方々が利用されている施設ということで、メルディアが応援できることはないかと考え、今回は滝乃川学園の事業の一つ、放課後等デイサービスの「さにー」を利用する子どもたちに向けて絵本を始めとした書籍を100冊寄贈しました。

寄贈にあたり、施設の緑豊かさを活かした青空の下で贈呈式を行い、小池代表理事が利用者の方々とも直接触れ合わせていただきました。「さにー」の施設内にたくさんの箱が届くと「なんだなんだ」と集まる児童たち。箱を開くと各々が気になる本を手に取り早速読んでいました。寄贈した本は、車に関するものや動物に関するもの、〝これなんだ？〟と探すもの、おとぎ話など多岐に渡り、彼らの興味関心をくすぐるものとなったようでした。

メルディアでは、障がいのある方々を応援するため、特別支援学校や社会福祉施設へ文房具等の寄贈を行っています。皆様の生活がより豊かになるよう、有用な支援をさせていただきます。ご希望の方はぜひお問い合わせください。

寄贈希望のお問い合わせ受付中！

ご希望の施設・学校関係者様は、寄贈希望の旨を添えて下記の連絡先へお問い合わせください。

一般財団法人メルディア　宛て
TEL:03-6302-1871
MAIL:org@mlda.jp

滝乃川学園放課後こどもセンター「さにー」

社会福祉法人滝乃川学園が運営する放課後等デイサービス。自然と触れ合う活動のほか、個別に学習する時間も。心理士による発達検査、ペアレントトレーニングも行っている。
https://www.takinogawagakuen.jp/

V.LEAGUE

理事長として 母として

バレーボール Vリーグ所属
つくばユナイテッド
Sun GAIA

子どもが秘めている様々な能力が、明るい未来に繋がると前向きに過ごしてほしい

茨城県つくば市、土浦市をメインホームタウンとするバレーボールチーム・つくばユナイテッドSun GAIA（以下、サンガイア）にて理事長を務める都澤みどりさん。「些細な事でも成長した姿を見られるのが楽しみ」と息子さんとのエピソードとともにお話を伺いました。

一般社団法人つくばユナイテッドサンガイア
理事長　**都澤みどり**さん

色んな場所にともに訪れながら奮闘する育児

創設者かつ父親であった前理事長の遺志を引き継ぎ、2015年からご自身の地元・茨城県を、バレーボールを通して盛り上げたいと日々奮闘されている都澤さん。彼女には自閉スペクトラム症と知的障がいのある6歳の息子さんがいます。息子さんについて伺うと、「運動や働く車が大好きです。癇癪を起こすことがあったり、自分の気持ちを言葉で表現することは苦手ですが、一人でどこかへ行くことはない慎重派です。朝起きて私が腕時計をしていないと持ってきてくれたり、赤ちゃんの時は、私が朝早く起きないといけない日はその時間の前に泣いて起こしてくれたりと、私の予定が分かっているかのようです。色んな世界を見せてくれる癒しの存在です。笑っている姿を見ると私も頑張ろうと思えます」と言います。仕事との両立はどうされているのでしょうか。「仕事と育児の両立は難しいなと感じます。家族や周囲の協力に感謝しかありませんが、子どもに寂しい思いをさせていると思うこともあります。ただ、新型コロナウイルスの流行をきっかけに、在宅で働くこともできると分かり、現在週1日は在宅勤務にして、家のことや子どもの送迎もできるようにしています。遠方で仕事がある際は、子どもも帯同可能であれば一緒に行って、帰りに遊園地に遊びに行ったりしています」と話します。

メンバーの半数近くが特別支援学校の教師であるサンガイア

些細なことでも成長した姿や色んなことが楽しみだと語る都澤さん。成長を感じたエピソードを聞くと「息子は言葉があまり出なかったのですが、最近は何かを開けてほしい時は『あけ』と言ったり、何が見たい？と聞いたら『ぱう（パウ・パトロール）』と言ったり、少しずつ言葉で表現するようになりました。また、何かお願いしたい時は『これを持って行って』と言うと持って行ってくれたり、言っていることは理解できているなと感じます」。

そして、今回の取材にはサンガイアの選手も駆けつけてくださいました。実はサンガイアには、特別支援学校の教員として働く選手が8名います。「弊チームでは選手はみんな仕事とバレーの二刀流です。最初は教員免許のある一人の選手が、教員をやりながらバレーをやっていたことが始まりです。選手活動と並行することに理解のある環境だったため、そこから教員免許を持っている選手も増えてきて、今では半分近くが教員と、チームカラーかのようです。息子も近々、特別支援学校の見学に行く予定ですが、今後選手にお世話になるかもしれないですね。色々な場所に連れて行ったおかげか、初めての場所にも抵抗がないので、学校にも馴染んでくれたらなと思います」と語ります。

障がいがあっても様々な能力を秘めていると前を向いてほしい

「私自身、息子が生まれてから初めての体験ばかりで分からないことだらけでした。自閉症と診断された時には、息子が大人になった時に果たして楽しいことがあるのかと、息子の未来を悲観してしまったこともありました。そのような時に東田直樹さんという自閉スペクトラム症の作家を知りました。彼は言葉を発するのは苦手ですが、ご自身が感じる純粋な気持ちを文章にできるのです。彼の本を読み『障がいがあるといっても、発信ができないだけで、自分というものを持ち、色んなことができる』ということが分かり、とても救われました。メルディアの読者の方には、私と同じように子どもの未来を悲観してしまうことがあったら、子どもたちは様々な能力を秘めていて、これから明るい未来があると前向きに過ごしてほしいです。サンガイアの理念で『Sports for All、All for Sports』というものがあります。スポーツは健常者も障がい者もできるもので、また、スポーツにより人生が豊かになるということを日々体感しています。息子もスポーツに携わると生き生きしていますし、試合の際にも関係者や来場されるファンの方々も生き生きされています。そうしたスポーツの大切さをサンガイアを通じ伝えていきたいです」。

現役選手たちに特別支援学校でのやりがいを伺いました！

#05/セッター/茂太 隆次郎選手　自分が考えた授業に積極的に取り組んでくれる姿を見るとやりがいを感じます。障がいがあってもその子にしかない能力があると思うので、それを活かせるようサポートしていきたいです。

#07/アウトサイドヒッター/長谷川 直哉選手　こちらが伝えようと頑張った分だけ生徒たちは返してくれるように感じます。全てをこちらがやるのではなく、どう支援したら生徒の成長に繋がるか、また実際に成長が見えることが嬉しいです。

#15/アウトサイドヒッター/川村 駿介選手　どうやったらその子が伝えたいことが分かるのかと色々な方法を試みて生徒に寄り添うようにしています。難しいことも多いからこそ、生徒たちの成長を見られたときはとても嬉しいです。

#22/アウトサイドヒッター/浅野 楓選手　これから色々な姿を見るのが楽しみです。担当する高等部の生徒たちには社会に出ることに向けて、積極的にイベントごとに参加するなど外に出て人と話す機会を大事にしてほしいです。

#25/セッター/堀 夏央哉選手　生徒たちは、本当にまっすぐな目や素直な心を持っているなと日々触れ合いながら感じます。指導の仕方によって彼らの成長の仕方が大きく変わるこの仕事がとても魅力的です。

2組&2名様 PRESENT

※画像はイメージです

Ⓑつくばユナイテッド
Sun GAIA観戦チケット ペア2組様
Ⓒレインポンチョ(ミニケース付) 2名様

詳しくは31ページ

つくばユナイテッドSun GAIA

Vリーグに所属し、メインホームタウンをつくば市・土浦市とするバレーボールチーム。エンブレム中央の"坂東武者"の通り、勇猛果敢に戦い、道を切り開いていく思いが込められています。 https://tuvb.jp/

「地域の一員」として
＼障がいのある方々が／

生き生きと暮らせることを目指して

Life is worth living.

横浜市青葉区にある障がい福祉施設・あおば地域活動ホームすてっぷ。駅から徒歩5分という立地で40名を超える障がいのある方々が日中活動を行っています。利用者に“びーさん”と話しかけられているのは所長の蕨圭二さん。施設の特徴や実現したい福祉の未来について伺いました。

支援者と利用者の繋がりを横並びで作っていく

「あおば地域活動ホームすてっぷ（以下、すてっぷ）」は、横浜市で社会福祉事業を幅広く手掛ける社会福祉法人ル・プリの障がい福祉部門として生活介護と地域活動センター（デイ型）の日中活動の他、一時ケア・ショートステイや基幹相談支援センターが設置され複合的に事業を展開しています。すてっぷは横浜市の施策に基づいて設立された施設です。また市では全ての区で地区別の福祉保健計画が作成されています。日中活動を通して地域との繋がりを深め、相談支援を通して地域を掘り起こし、様々なニーズを受け止める場となっています。

まずは、蕨さんにすてっぷの特徴を伺いました。

「建物内に明るく光が入るような造りにしています。通所している仲間たちもとても元気です。また職員もかなり明るいですね。日頃から気軽に話し合え、連携して支援に取り組める職員集団を目指しています。利用者と支援者の関係性を上下ではなくフラットな関係性として接しています。利用者ファーストを基本としながら、両者の繋がりを横並びで作っていくことを意識し、一緒に行い一緒に作っていくという形なので非常に楽しくやっています」。

「障がいがあってもできるんだ」と理解してもらう

取材の際、利用者と支援者の関係性がとてもフラットであることを感じたすてっぷですが、蕨さんご自身はどのような思いを持って支援されているのでしょうか。

「私はもともと幼稚園で体育の先生をしており、サッカー教室や体操教室も行っていました。障がいのある子どもたちは、スポーツ教室で断られるのが当たり前でした。私は障がいがあっても「色んなことができるんだ」と子どもたちから教えてもらい、これをきっかけに障がい者スポーツに携われないかと福祉の世界に飛び込みました。最初は障がいのある方にできることを、という働きからでしたが、仲間たちから学び、経験や年齢を重ね今は、「障がいがあってもできるんだ」「色んなことを思っているし考えているんだ」など、障がいのある人たちの特性だけでなく、思いを含め理解を深めてもらえるよう活動しています。これは保護者の方にも、地域の方にも、もちろん職員も含めて、正しい理解をしてもらうことで、過ごしやすい環境や活躍できる場や機会をつくれると感じているからです。そもそも人を理解することは簡単ではありませんが、簡単ではないからこそやりがいを感じます。彼らが地域で生き生きと暮らすためにどれだけの後押しができるか、ですね」と、思いと活動の変化について話されています。

利用者の本当にしたい生活ができるような支援を

すてっぷでは最近、コロナ禍以降休止していたイベント事が復活してきているそう。「日中活動では、バーベキューや旅行にでかけるなど取り組みを再開しています。また以前に地域開拓と言って、地域の食事場所を探して、障がいがある方でも普通には入れる場を開拓していました。地域にとっても良い活動で、近々再開する予定です。保護者と離れた場で、彼らは家庭とは違った姿を見せてくれ、将来的に親もとから離れて自立した生活を過ごすことも見据えながら、楽しい時間を皆で過ごしています」と蕨さん。「ここに通っている人たち1人1人が地域で活躍できるようにというのが第一の想いです。彼らも立派な地域の一員です。パンを作ったりクッキーを作ったり、作品などを作ることを通して地域と繋がる機会が増えたらいいなと思っています。

また彼ら自身にも仕事や活動をしに来ているんだと自覚や自信を持っていただくためにも自分で稼いだお金を自分で使うこと、どんどん地域に出ていくことをしてほしいです」と、日中活動を通じて彼らの生活がより豊かになるよう展望を語ります。

「彼らの本当にしたいことが生活で出来ているかというと、やはりまだ狭い世界に居ると思いますので、いろんな経験をしていただいて、本当の意味で自分のしたい生活が選べるようになってほしい。そのために今後も支援の充実と地域づくりを含めた取り組みをしていきたいと思います」。

障がいのある方がチャレンジし、自らの主体性を持ってほしい

最後に、読者の皆様へメッセージを頂きました。「私自身、この地で長く福祉に従事していろんな方たちに接してきました。そこで強く思うことが〝チャレンジをしてほしい〟ということです。親御さんから見れば心配事も多く保守的になりやすいところがあるかもしれませんが、とにかくいろんな経験や体験をして、本人の活動の幅を広げてその中からやりたいこと、やりたい生活を自ら選べるようになってほしい。そういう意味ではすてっぷはチャレンジができる、チャレンジをする場として使ってほしい事業所です。仲間たちは、通わされているのではなく、自分が通っている・自分がやっているという主体性を持てるようにする。そうして、やっているという気持ちが前に出てくると自信にもつながります。ぜひ、いろんなことにチャレンジしてください」と熱い言葉を頂きました。

あおば地域活動ホームすてっぷ
〒227-0062
神奈川県横浜市青葉区青葉台2-8-22
https://le-pli.jp/facility/aoba-homestep/

3名様 PRESENT

あおば地域活動ホーム
すてっぷオリジナルキャンドル

詳しくは31ページ

子どもの自主性と自立心を育む モンテッソーリ教育

成長に合わせ必要な教具で学びを与え、子どもの可能性を高める「モンテッソーリ教育」をご存じですか？実は身近にあるもので様々な教具が作れます。多様な教具を生み出しながら活動されるEMMA株式会社の伊藤あづささんの教室にお邪魔しました。

モンテッソーリ教育の始まりは知的障がい児の治療

今から117年ほど前、イタリアの女医、マリア・モンテッソーリがこの教育法を確立しました。彼女は初めて勤務した精神病院で、知的障がいがあるとされる子どもたちが鉄格子に囲まれた暗い部屋で、床に落ちたパンくずで遊んでいることを知りました。何もない部屋の中で唯一あるパンくずで遊ぶ姿を観察する中で、「彼らは指先を使って遊びたがっている」と気づき、指先を使う教材を次々と与え、治療を試みました。すると、彼らの行動に変化があらわれ、その成果が認められ世界に広まりました。

「日本の教育と異なり、子ども主体の教育です。たくさんの教材が教室に並んでいますが、どれを使うかを選ぶのも子どもも。これは自主性に繋がりますし、何回でもやっていいんです。制限がなく、さらに1人1人の成長に合わせての個人活動なので、みんなと違うことをやるのが特徴です」と伊藤さんは話します。

自分がしていた子育てが本に書いてあり、自信になった

現在、横浜、大阪、銀座に教室を構えるEMMAですが、伊藤さんはずっと幼児教育をされてきたのでしょうか。「キャリアの始まりは子ども服の販売で、保育士でもありませんでした。ただ、元々ベビーサインという赤ちゃんに手話を教える指導をしていたので、周りに親御さんはたくさんいて、『あづさ先生の子育てを教えてほしい』と長らく言われていました。私としては普通の子育てをやっていると思っていたのですが、息子が3歳のときに転園した先がたまたまモンテッソーリ保育園で、この教育を知りました。そして、そこで借りた本に私がやってきた子育てが書いてあったのです。それが自信に繋がり、見よう見まねで最初は自宅のリビングでモンテッソーリ教室を始めました。

この教育は日本だと、意識の高い方たちが受ける教育と思われがちですが、原点は障がい児教育で、またローマのスラム街の子どもたちに教育をしたのがきっかけなので、日本でももっと広く受け入れてもらえるよう活動しているところです。そもそも、教具は特別なものである必要はなく、100円ショップにあるもので作れるのでご自宅でも取り組めるのです」。

横浜の教室と教具の一部

教室に通う希一くん親子(左)と莉誉ちゃん親子(右)

子どもたちからもらうパワーが元気の源に

子どもたちとの触れ合いをどう力に変えているのか聞くと、「子どもたちの傍で彼らの真剣で集中した姿を見ると、私ももっと頑張らないとパワーをもらいます。また、自分でできた！という瞬間はすごい良い顔をしてくれるのでそれを見て癒されるなど、彼らから学ぶことがたくさんあります」と伊藤さん。教室に通われているお母さん達も「息子は今5歳で知的好奇心が高まっているところです。骨形成不全症という疾患のため怪我をしやすいですが、本人からそれでもやってみたいという気持ちが出ているので、色んなところに行ってできることを増やしてあげたいと感じます」(希一くんママ)。「娘がいることで、小さなことにも喜びを感じられるようになりました。大変なこともありますが、可愛さの方が上回っています。今は就学前で、療育や習い事で週4回ほどの送迎が大変ですが、先生に会うのを楽しみにして意識をプラスに持っていっています」(莉誉ちゃんママ)。

全ての子どもたちが平等に質の高い教育を受けられるように

伊藤さんには2つの展望があるそう。「一つは教育格差を無くすこと、もう一つは親御さんのストレスの軽減です。一つ目について、モンテッソーリ教育を受けるとなると月謝が高く付く部分はあるのですが、例えば、シングルの方は教育費を削る傾向があります。実は、私は8年前に主人を病気で亡くし、精神的、金銭的不安を経験しました。シングルというだけで、塾に行けないとか本が買えないとか、そうすることで生まれる格差を無くしたい。だから、100円ショップでシールブックを出すなど、誰でもモンテッソーリ教育が受けられる環境作りをしたいと考えています。二つ目は、ストレスによって子どもに上手く対応できないということが無いように手助けをしたいのです。教室に来るときには親子で来ていただいて、空いている時間に親御さんが家で困っていることをフォローできればと思って接しています。また、モンテッソーリ教育自体が自主性や自立心を育てるので、それによって親御さんの育児負担を少しでも軽減できるようにサポートできれば」と熱い思いを語ります。「全てのお子様とその家族が笑顔で充実した毎日を過ごせるように、本などで情報発信をしています。ぜひこの機会を通して、日常生活が豊かになるようなことをお伝えできればと思っています」。

教具は100円ショップにあるもので作れる！

ビー玉はめこみ 1歳半〜

ふたに穴をあけて準備完了。モノを指で詰め込んで落とす活動。子どもの力でギリギリ詰め込めるサイズが大事です。

穴あけパンチ(一つ穴) 2歳〜

穴あけパンチで穴をあける感覚に興味を持ったら、台紙に印をつけ、準備完了。パンチを裏向きに持って印に合わせて穴あけ。

3名様 PRESENT

E

藤崎達宏、伊藤あづさ著「子どもの才能を伸ばすモンテッソーリ教具100」(三笠書房、2021)

詳しくは31ページ

伊藤 あづさ

モンテッソーリ幼児教室　こどものいえを運営するEMMA株式会社代表。講師として子ども・親御さんたちと日々触れ合うと同時に、身近なもので制作できる教具の発明も行っている。

https://emma-monte.jp/

自分の特性の良い面も悪い面も、発達障がいの視点から認識してプラスに

著書「発達障害の子どもたちは世界をどう見ているのか」にて、不登校になってしまう子どもたちや学校環境について語る精神科医・岩波明先生。「我々はきっかけです。特性をうまくプラスに変えて、社会で普通に暮らしていくきっかけとなれれば」。

もしかしたら発達障がい…？という時に手に取ってもらいたい

精神科医の第一線として多数の著書を出版している岩波先生に「発達障害の子どもたちは世界をどう見ているのか」（SB新書、2023）について話を聞きました。どのような内容の本なのでしょうか。「発達障がいはだいぶポピュラーになり、なんとなくわかっている方は多いと思いますが、実際、『何が問題で何が問題ではない』、『どういう人に診断がついて、どういう人に診断がつかない』というところはあまり浸透していないですし、誤解も多い状況です。本書では小児期に見られる発達障がいの主なものと、それに関する症状や経過について、またそれぞれの疾患におけるお困りごとに対してどう対応していったらいいかについて述べています。ですので、ご自身のお子さんや、身近な人がもしかすると発達障がいかもしれない、あるいは周りから自身が指摘されたといった場合に、手に取っていただければ参考になるかなと考えています。

今回、子どもから大人まで網羅するような内容ではありつつも、特に子ども中心の内容になっています。私は普段、小児期を担当しているわけではないのですが、どんな大人であっても子ども時代はあったわけで、その時の症状や治療が大人に影響を与えている。ということはやはり子ども時代が重要です。また、本人に対してだけでなく、家族も含めた全体へのケアが大事だと考えているので、そういう思いを込めて執筆しました」と話します。

受診の前にまずは親に「発達障がい」を知ってほしい

発達障がいについて様々な情報をインターネットでも調べられますが、受診するタイミングを迷われる方もいるのではないでしょうか。すでに学校の先生から相談や受診をすすめられているケースであれば、積極的に専門機関に相談に行く、受診するということが望ましいと言いますが、現実にはそういったケースはそれほど多くないようです。「親から、あるいは身近な人から見て、発達障がいの可能性がありそうだという場合は、まずは知ることが大切です。お子さんを受診させるかどうか考える前に、ある程度発達障がいとはどういうものか、今どういう問題が起きているのかを親御さんが認識する。そのために最初は親御さんだけの相談というのもありだと思います。インターネットの情報だけに左右されず、しっかりした内容の書籍や記事を可能な範囲で読んでいただいて、自分のお子さんと照らし合わせて考えることが必要だと思います」とのこと。

診察において特に近年増えてきた、変わってきた傾向などはあるのでしょうか。「中学生ぐらいの子どもの不登校は非常に増えていると感じます。色んなケースがありますが、学校の課題が非常に多く、適応しきれない、その辺りが上手くいかず、引きこもってしまうようなケースは少なからずあります。ですが、我々のところに来てくれる人は、頑張りたい、回復したいという意思がそれなりにある方たちなので、そういう場合は上手く場所を与えてあげれば、中学高校不登校でも、大学に進学するといったケースもあります」。小中学校の存在は子どもにとってとても大きいと話す岩波先生。「私がよく話しているのですが、果たして今のままの小・中学校の体制でいいのか。特に小学校のクラスの人数を減らすべきだと考えています。小学校くらいで障がいの特性のある子を個別対応してあげることができれば、適応できる、能力が伸びるお子さんも多数いらっしゃると思うんです。今のままだと、発達障がいの子は置き去りにされ、時にはいじめられ、不登校になるという状況を生み出してしまいます。こうした現状には声を上げ続けたいと思います」と語ります。

では、発達障がいへの対応についてどのようにアドバイスを受けるのが最適なのでしょうか。「まずはどこに相談に行けばいいのか、ということです。地域によって違いもあるので、一概には言えませんが公立の精神保健福祉センターや、学校によってはスクールカウンセラーが対応してくれる場合もあります。まずは相談の仕方についてアドバイスを受けて、受診の場合も何科に行けばいいのか、どこの病院に行けばいいのか、混んでいても専門医に行った方がいいのか、など一般的な指針についてアドバイスしてくれるような情報が得られるとよいかと思います」。

自分の特性を認識して、特性をプラスに変えて生きるきっかけを

最後に、精神科医のやりがいについて伺うと「いろんな疾患の方を見てきましたが、発達障がいの方は回復するし良くなるという意味で一番やりがいがあります。良くなるというのは、元よりも良くなるということです。例えば、うつ病の方は鬱の前の状態に戻ることを目的としていて、それ以上は良くならないのですが、特にADHDの方は、治療が上手く乗ると、治療前よりグレードアップするんです。それは素晴らしいことだなと思います。例えば、子どもで言えば起業した、年収が何倍になったなどの報告を受けます。自分の問題・特性を、良い面も悪い面も発達障がいの視点から認識できたということと、本人の努力による結果ですね。加えて、ある程度薬物療法によって問題の症状を改善させたという面もあります。そういう、良くなるきっかけを与えられるという点がこの分野にはあります。

現在は社会的に、発達障がいが一定程度認められつつあります。その一方で、学校や会社にいる人が無理解、無知であるケースも未だにあります。少し目立つ行動のある発達障がいの子どもは、特に担任の先生によって扱いが違うなど子ども時代に非常につらい思いをしている方も少なからずいるのではないかと思います。けれども、ちゃんと認めてくれる人もだんだん増えています。きちんと相談して、自分の特性を認識して、特性をプラスに変えて生きていけている人も多くいます。ほとんどの人は実は社会で普通に暮らしていける、そういう意味では健常者の特性を持った一部であると考えていいと、私の患者さんたちには言っています。つらい時期もあると思いますが、良い時期も来る。そういう認識を皆さんにも持っていただきたいです」。

岩波 明先生

1985年東京大学医学部卒業。東京大学医学部精神科、ドイツ留学を経て、埼玉医科大学、東京都立松沢病院において、重症例を含む様々な分野の診療にあたる。うつ病の薬物療法、統合失調症の認知機能障害、精神疾患と犯罪、司法精神医療等、幅広いジャンル、疾患に対応する。2015年昭和大学附属烏山病院病院長を兼任。現在、大人の発達障がいの研究、臨床を重点的に取り組んでいる。

3名様 PRESENT

岩波明著「発達障害の子どもたちは世界をどう見ているのか」（SB新書、2023）

詳しくは31ページ